

人文科学研究所 2020 年度第 2 回総合研究調査「宮城県」

堀江 洋文

2020 年度第 2 回の人文研調査旅行は、宮城県で 3 月 11 日から 13 日の 2 泊 3 日の旅程で実施された。調査初日は東日本大震災の発災からちょうど 10 年の日である。11 日の予定として、当初宮城県美術館と仙台博物館での調査を組み入れていたが、調査開始 1 か月前の 2 月 13 日に福島県沖で起きたマグニチュード 7.3 の地震によって両館が受けた被害は甚大で閉館が続いたため、急遽旅程を変更せざるを得なかった。そこで、最終日に訪れるはずだった松島市の瑞巖寺と多賀城市の調査を先に進めることとなった。調査を終え帰京してから 1 週間後の 3 月 20 日にも宮城県南部は震度 5 強の地震に見舞われ、今回の調査は、幸運にも調査地の宮城県南部を襲った 2 つの大きな地震の間を縫って行われたことになる。コロナ禍に加え地震対応と、今回の調査は災害に対する様々な調整が必要とされ、調査の大きなテーマの一つが「災害」であったこともあり、災害を身近に感じる機会ともなった。

調査初日の 11 時前に新幹線で仙台に到着した後、宮城交通の貸切バスで直接松島町に向かう。松島港近くで昼食を取った後、10 年前の津波襲来時に「防波堤」の役割を果たしたと言われる松島湾の沖合の島々を船で巡る。松島に関し歴史を振り返ると、芭蕉と彼の奥州・北陸の旅に同行した河合曾良は、現在の白石市にあった越河番所で仙台藩に入ると、名取川を渡って仙台に入り、仙台国分町の大崎庄左衛門の旅宿に 4 泊した後、多賀城跡経由で塩竈に入っている。翌朝塩竈明神に参拝した後、2 人は舟で松島に向かう。曾良の『奥の細道随行日記（元禄二年日記）』には、「千賀ノ浦籬島都島等所々見テ午ノ刻松島ニ着船」とあるから、岸に沿って舟を進めたのであろう。芭蕉達は、女房三十六歌仙の 1 人殷富門院大輔によって百人一首第 90 番で読まれ、死者供養の霊場でもあった雄島の磯に到着し、その後お茶を飲んでから瑞巖寺に詣でている¹⁾。ところで、東日本大震災の時には、一番沖合の桂島や同じ松島湾内の塩竈ではかなりの津波被害があったようであるが、松島町の被害は周辺地域と比較すると軽微であった。それでも、瑞巖寺管理下の五大堂に立ち寄った後に訪れた瑞巖寺境内では、参道の途中まで津波の水が押し寄せたようで、海水に浸かった参道両側に立っていた杉が枯死しており、一方津波到達場所を記した標識から本堂にかけての杉木立は昔のままの姿を残していた。臨済宗妙心寺派の寺院である瑞巖寺は、政宗の時代に造営され、本堂、庫裏、廊下が国宝指定を受けている。円仁が開山し松尾芭蕉が訪れたとして、山形の立石寺、岩手の中尊寺、毛越寺と共に四寺廻廊と言われる東北巡礼コースに加えられている。各地からの瑞巖寺への巡礼者は江戸期にも多く見られ、慶長年間に徳川幕府への答礼使としてヌエバ・エスパーニャから派遣されたセバスティ

アン・ビスカイノもこの地を訪れた際に、スペイン・ガリシア地方の巡礼地サンチャゴ・デ・コンポステーラのようにこの寺に巡礼者として詣でる者が非常に多いと記している。ビスカイノは伊達政宗の薦めで瑞巖寺を訪れ、木造なれども彫刻や手工の精巧さに驚いている。石造であればスペイン王室の居城でもあったエル・エスコリアル修道院、木造であれば瑞巖寺を以って世界に並ぶものなしとまで賞賛している。さらに、寺は僧侶によってよく管理され、多くの収入がある様が描写されている²⁾。本堂から出て宝物館に立ち寄った後、バスに戻る途中の海辺で10年前に震災が起きた14時46分を迎える。多くの人々とともに松島の海に向かって犠牲者に哀悼の意を表した後、バスで多賀城市を目指す。

多賀城市では、まず多賀城政庁跡を調査。多賀城中心部の政庁正殿跡と政庁南門跡を見た後、南を見下ろすと南北大路の跡が整備されつつあり、その先に外郭南辺の中央にあった外郭南門の復元工事が行われていた。外郭南門の隣には、これまで多くの和歌にうたわれ、芭蕉も「泪も落るばかり也」と感動し、「苔を穿ちて文字幽か」なる碑面を写し取ったとされる壺碑（つばのいしぶみ、別称多賀城碑）が建つ。次にバスで外郭南門工事現場の隣を通り東北本線を横切って、国府多賀城駅の南に建つ東北歴史博物館を訪れる。東北全体の歴博を多賀城に置くことについては議論もあったようであるが、1階の総合展示室には旧石器時代から近現代まで、多賀城はもちろんのこと、古墳、蝦夷、奥州藤原氏等の展示を通して東北の歴史が通観できるようになっている。3階にはこども歴史館や図書情報室があり、後者には東北の地方史に関する図書が集められている。博物館の東に隣接する多賀城廃寺跡での調査は時間の関係で叶わなかったが、博物館にあった廃寺伽藍模型によると塔、金堂、講堂、僧坊を備えた堂々たる建造物で、多賀城と共に建立されて、未だ蝦夷の影響の残る東北の安定に寄与する目的があった。多賀城市から仙台のホテルへの帰路、仙台城址に立ち寄り、旅程変更前は訪問予定であった伊東豊雄の代表的建造物「せんだいメディアテーク」前を通過した。人文研総合研究調査で伊東氏の建築物との出会いは、2年前の台中国家歌劇院以来である。

12日は、朝8時15分にホテルを出発。バスは三陸沿岸地域の物流を担う高速道路「三陸自動車道」（通称三陸道）に入って石巻に向かう。三陸道が石巻に入ると左にイオンモール石巻が見えてくるが、このショッピングモールは、震災後長らく復旧ができなかった仙石線に代わって仙台への通勤通学のために高速バスが発着した場所で、イオン側は無料で駐車場を提供したとのことである。まもなくして、石巻女川インターで一般道に降りたが、三陸道は、仙台から東松島市までは有料区間であるが、そこからは無料区間になっている。復興道路に位置付けられている高速道路であり、物流を円滑にして被災地の復興を支援するための無料化である。高速道路から一般道に入るところに石巻赤十字病院がある。旧北上川の河口近くにあった石巻市立病院が津波によって機能停止に追い込まれたため、津波被害を免れて地域の災害拠点病院と

して中核的役割を果たした病院である。橋を渡って旧北上川の対岸にある石巻専修大学に入る。

正門で、同大学開放センター長の李東勲経営学部教授の出迎えを受ける。開放センターは大学と地域連絡の窓口であり、地域の各種課題に研究の側面から答える共創研究センターと共に、震災後の大学と被災地域との関係作り、町の活性化のための活動等復興事業の中心を占めてきた。広々としたキャンパスであるが、震災直後の混乱の様子の説明を李先生から受けた。震災直後から大型ヘリコプターが、支援物資が大学には備わっているとの間違っただけの情報もあって、被災者を次々と運び入れ、一時は状況を知らされていない大学側は混乱状態にあったとのことである。しかし、すぐに大学は被災者を教室に受け入れて避難所としての機能が果たされる。李先生は、具体的にどのように被災者が教室で過ごしたか語って下さったが、物資の不足は当初深刻であった。機械工学関係者による「超法規的」方法での自家発電装置の運用など、緊張の続く被災直後の地域だからこそその逸話がいくつか紹介された。その後被災地最大のボランティアセンターが学内に設置され、大きなテント村も出来上がる。そして自衛隊宿营地や日赤の救護所、日赤の看護専門学校や県の合同庁舎等の機関の受け入れと続く。学生、教職員の約3割が被災者であるという特異な立場から、地域支援というよりは、同じ被災者として共に立ち上がっていかうという考えであったと聞くが、学生納付金を大学運営の基礎とする私立大学としては難しい判断があったと推察される³⁾。

李先生にはこの日一日調査にお付き合いいただくことになり、牡鹿半島における被災地とその復興状況を色々と解説していただくこととなった。ちなみに李先生は本学経営学研究科で博士号を取得されており、指導教官は田口冬樹先生であった。李先生は地元産業活性化のために、町田市の複合施設「ぽっぽ町田」にご自身のマーケティングのゼミ生を連れて牡蠣小屋を出店し、石巻産牡蠣の宣伝に一役買っている。石巻市の万石浦にある三養水産との協力事業である。三養水産は、牡蠣養殖の父とも称される宮城新昌の「国際養蠣」を引き継いだ会社である。石巻専修大学を出発して牡鹿半島に向かうと左に万石浦が広がるが、万石浦は牡蠣の養殖で知られ、実は広島牡蠣も稚貝はここから持っていくとのことである。宮城種の稚貝は全国のみならず諸外国にも送られ育てられている。牡蠣養殖は戦前に松島湾や万石浦に広がり、今では仙台湾（厳密には松島湾と石巻湾）の他に、この後訪れる太平洋岸の女川や雄勝（おがつ）も名産地として名乗りを上げている。

牡鹿半島西岸では、大原浜を目指してバスを進める。万石浦を離れトンネルを抜けてしばらく進むと半島西岸の桃浦に出るが、すぐに道路に面してツリーハウスが現れる。このツリーハウスの仕掛け人は、「東北に100のツリーハウス」プロジェクトを進める糸井重里氏であるが、道路から下の蛤浜にあるカフェ「はまぐり堂」への入り口の目印でもある。「はまぐり堂」は、この浜で生まれ育ち石巻専修大学で修士課程を終えられた亀山貴一さんが、水産高校教員をや

めて津波の被害にあった地元の蛤浜復興のために建てたカフェである。津波後に残された民家をカフェに改装したもので、カフェではジビエや魚介も提供されており、牡鹿半島が鹿の食害に悩まされていることを考えると、一石二鳥の試みでもある。蛤浜は被災以前から限界集落と言われていたが、被災によって地図からも消滅する危機に直面していた状況下で、亀山さんが立ち上げたプロジェクトがこのカフェを中心とした活動である⁴⁾。さらにバスを走らすと、支倉六右衛門（常長）が1613年10月にサン・ファン・パウティスタ号で出帆したと伝えられる月浦を見下ろす高台に到着する。月浦湾を見下ろす高台に女優佐藤オリエの父佐藤忠良作の支倉常長立像がある。隣の解説パネルには、月浦が同号造船・出帆の地とされているが、出帆の地には諸説あり、一方造船地については、これから訪れる雄勝の呉壺が最有力とされている。この問題については、本月報掲載の拙稿で紹介する。半島西岸に沿って県道2号石巻鮎川線をさらに南に進み、嘗て捕鯨で栄えた鮎川町にもう一息のところにある大原浜に到着する。港近くに牡鹿地区津波犠牲者を慰霊する碑として、「牡鹿祈望の輪」と呼ばれる慰霊碑とモニュメントが建立されている。隣にマスコミでも取り上げられた食堂「いぶき」の古民家が建つ。大原浜に建つ築80年の家を、被災地の支援を長期に渡って展開する一般社団法人オープンジャパン



月浦の支倉常長立像

ンが「古民家再生IBUKIプロジェクト」として再生させたものである。大原浜を含め津波の被害の大きかった牡鹿半島の海岸線の港町は、港に一部の機能を残しながらも、少し山手に新居を建築し高台移転を果たしている。しかし、牡鹿半島の高台移転先の居住者の多くは、年配者が占めているとのことである。

バスはここから牡鹿半島を横断し、半島中央部を貫く県道220号線（通称牡鹿コバルトライン）を超えて、女川原発のPRセンターを目指す。福島第一原発と比べ女川原発が重大事故に至らなかった理由については、東電と比べ東北電力、或いは東北人の津波に対する恐れがより強かったこと、原子炉建屋の海面からの高さに見られるように

869年の貞観地震級の大津波をある程度想定していたこと、幸運にも1系統だが外部電源が失われなかったこと等が挙げられている。当然ではあるが、PRセンターには最悪を想定したそのような悲壮感、緊迫感はあまり感じられない。センターのHPが「見て、触れて、体験して」楽しく学べる施設と謳うように、原発の必要性及び安全性が強調されている。パネルや模型、映像等で提供される情報からは、電気の安定供給を実現するための電源構成の中で原子力の果たす役割をアピールする狙いがあると思われる。残念ながらPRセンターのある山側からは樹木に邪魔されて女川原発の全景を見ることはできなかった。原子力規制委員会による安全審査で事実上の合格が出ており、2020年11月に宮城県と女川町及び石巻市の地元同意を得た女川原発2号機の再稼働は、福島第1原発と同じ沸騰水型炉であるが、震災直後に多くの被災者を原発敷地内に収容したこともあり、地元の同意は得やすいとの意見も強かった⁵⁾。東北電力は2022年以降の再稼働を模索するが、事故の際の避難計画に実効性がないとして、地元石巻の住民グループは再稼働差し止めを求め今年5月末に仙台地裁に提訴している⁶⁾。

PRセンターで30分ほどを過ごした後、原発からは若干離れた女川の町中にあるシーバルピア女川にて昼食をとる。シーバルピア女川とハマテラスは、石巻線の終点女川駅から女川湾に向かってゆっくりと下っていく煉瓦道のプロムナードで、両側に食事処や店舗が並んでいる。牡鹿半島では道路や堤防工事が絶えず進行中で、同行の李先生も、わずかな期間に地域が変貌していく様相を見て驚かれていたが、女川の復興は、海の見える駅としてJR女川駅と石巻線の復旧が実現してから本格化した。女川町は、岩手、宮城、福島3県で津波による死者・行方不明者数の浸水域人口に対する比率が11.63%と最大であったことを考えると、シーバルピアやハマテラスに見られる復興の成果には驚かされる⁷⁾。シーバルピアでは震災復興NPO団体に所属する石巻専修大学出身の若者と話したが、今も支援団体の



サン・ファン・パウティスタ号の造船地といわれる雄勝町具壺に建つ「支倉六右衛門造船地」の碑

活動を垣間見ることができる。

女川から国道 398 号を海岸線に沿ってさらに北へバスを進め、石巻市雄勝を目指す。雄勝の町に入る直前に、この日の調査地の 1 つであるサン・ファン・パウティスタ号の造船地と言われている場所を確認する。気を付けていないと通り過ぎてしまいそうな国道脇に、「支倉六右衛門造船地」の碑が建つ。国道を挟んで、実際に造船が行われたとされる広い窪地がある。雄勝の町に入ると、雄勝硯伝統産業会館を訪問。雄勝石を原材料に、この地は国内有数の硯の生産地である。最近では雄勝石皿が主力製品となり、伝統産業会館でも雄勝石を使った身近な日用製品を多く扱っていた。屋根材としても使用され、東京駅丸の内駅舎修復では屋根の天然スレートが洗浄と補修のために雄勝の業者に託され、半分を納品した直後に残りが津波で流され、その回収作業で多大な努力が払われたと聞く。

次の訪問先は、北上川河口に近く震災時の津波で児童、教職員 84 名が犠牲となった旧大川小学校跡である。訪問の前日被災 10 年の追悼慰霊祭が行われ現場には少し緊迫感が残っているのかと思われたが、訪れると工事関係車両も入り災害遺構の整備が進む普段の旧大川小学校跡であった。雄勝から山を越え北上川に近づくと正面に新北上大橋を見て、津波襲来時の避難場所として選定されていたことで問題となった橋のたもとの三角地帯を横にしなが、工事車両も並ぶ旧大川小学校跡の駐車場に入る。災害遺構としての保存が決まり、さらに児童 23 人の遺族が市と県に損害賠償を求めた大川小津波訴訟では、最高裁が上告棄却したことで仙台高裁判決が確定し遺族側が勝訴したことでこの案件は一段落したとの印象もあった。地方自治体が問



旧大川小学校跡

われる責任範囲を逸脱した判決との意見もあった一方、遺族側には避難時間は十分あったのにどうして裏山に逃げなかったのか、組織の機能不全があったのではないのかとの疑問が呈されている。確かに裏山を目の前にすると、どうしてここへ避難しなかったのかとの疑問は湧くし、見学を終えてバスに戻ると、先生方に読んでいただきたいと「小さな命の意味を考える会」の冊子が届けられていた。会の代表の元中学教師佐藤敏郎さんはマスコミでもしばしば取り上げられているからご存じの方も多と思う。旧大川小学校から北上川に沿って石巻市街地に戻る途中に、上品の郷に立ち寄る。日帰り温泉施設を持つ道の駅であるが、震災直後は津波の被害を免れ、被災者や復旧工事関係者、ボランティアの休息、宿泊場所となった。

最終日の13日は、津波襲来時に避難の高台となった日和山の調査が始まる。日和山は、発掘調査の結果土塁や空堀の遺構が発見され中世の城館があったことが推測され、石巻城跡の可能性が指摘されている。この城は源頼朝から牡鹿郡等の所領を賜った奥州総奉行葛西清重によって築城されたとされるが、この説には異論もある⁸⁾。また、芭蕉と曾良がここを訪れ、曾良は旅日記で日和山からの景色に言及している。曾良の日記には、「日和山ト云へ上ル石ノ巻中不殘見ユル奥ノ海遠鳴尾駁牧山眼前眞野萱原も少見ゆる帰ニ住吉ノ社参詣神ノ渡り鳥居前」とある⁹⁾。奥ノ海とは万石浦のことで、遠鳴は男鹿半島。尾駁牧山は尾ぶちの牧の牧山で、この後芭蕉と曾良が訪れる住吉神社（大島神社）の旧北上川を挟んだ対岸にあるかつての放牧地であった。眞野の萱原は旧北上川に左岸から流れ込む眞野川の周りの原で、日和山からは見えるかどうかぎりぎりのところである。このような曾良の描写から、彼らは、今回我々が日和山で見たよう



日和山から見た中瀬（中州）。嘗ては中瀬とその両対岸が賑わった

に、旧北上川の河口のある南側と、中瀬と呼ばれる同川中州及びそこからの上流地域が見える2つの展望スポットから石巻の町を見たと考えられる。

元禄2年(1689年)深川を発って陸奥、出羽、北陸の旅に出た芭蕉と曾良は、5月9日(陽暦6月25日)に松島に着き一泊した後、翌日には高城、陸前小野、矢本というほぼ現在のJR仙石線に沿うルートを7里12丁(約30キロ)歩いて石巻に到着する。曾良の日記では、この矢本辺り(現東松島市)で喉が渇き家々で湯を求めたが与えられず、偶然出くわした「刀さしたる道行人」(名はコンノ源左、或いはコンノ源太左衛門)が彼らを憐れに思って、彼の知人宅に100メートル程戻って湯を飲ませてくれたとある。その道行人が石巻の四兵衛宅に宿の手配までしてくれたようである¹⁰⁾。四兵衛宅に着いて、降っていた小雨が止むと2人は日和山に登る。日和山を下りてからは、曾良日記に「帰ニ住吉の社参詣袖の渡り鳥居前也」とあるように、住吉神社に詣でて「袖の渡り」を見てから宿に戻っている。袖の渡りについては、射和商人でも有名な射和村(現三重県松阪市)出身の俳人大淀三千風が記した『松島眺望集』の石巻の欄に、「川中に大きな岩あり、此かげ浪巴をなせり。此故に此名あり、則袖の渡り也。川はら五丁余、川上にまののかやあらあり。」とある。石巻の地名の由来が紹介され、真野の萱原への言及がある。袖の渡りとは、源義経が奥州下向の際に、船賃の代わりとして片袖をちぎって渡したという言い伝えに由来する。一方芭蕉の『奥の細道』では、「袖の渡り尾ぶちの牧真野の萱原をよそめに見て」と、簡単な描写で石巻の印象が薄い。ところで、2人が泊まった新田町(しんでんまち、現千石町)の沼倉四兵衛宅は、今回我々が宿泊した石巻グランドホテルの向かい側の駐車場にあったとのことである。ホテル1階の駐車スペースの端に新田町碑という小さな地碑が建てられ、碑には芭蕉の石巻での行動が短く記されている。そして2人は、翌日には北上川に沿って北に歩を進め7里18丁歩いて登米(戸伊摩)に到着しているが、今日の実感ではかなりの強行軍であったと思われる。芭蕉と曾良の健脚ぶりを褒めるべきであろうが、彼らは東北において一日に11里以上を歩いている時もあり7里は普通と考えてよい。しかし、かなり急いで仙台湾沿岸を通り過ぎたことになる¹¹⁾。

芭蕉がわざわざ石巻に足を延ばしたことについては、いくつかの説が提示されてきた。そもそも芭蕉の『奥の細道』の記述と曾良の日記には、松島から石巻に到着後の行程や日付を含む状況説明において若干の齟齬があり読者を悩ませる。芭蕉は平泉を目指して、途中の「姉齒の松」(現栗原市)や「緒絶の橋」(現大崎市古川地域)など歌枕とされ古来より名が知られていた地を踏もうと思っていたようであるが、獣道に迷い込んで「終に路ふみたがへて、石の巻という湊に出」と、石巻が本来の目的地ではなかった書き方をしている¹²⁾。一方曾良の旅日記では、予定の行程通りに石巻に着いたと考えられる描写がなされている。芭蕉は「金台山、海上に見わたし」と書いているが、金華山は松島から石巻間の行程のどこからも見るのは難しく牡

鹿半島のどこかを金華山と思った可能性がある。しかし、「数百(すはく)の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、竈の煙立つけたり」との芭蕉の石巻の町の短い描写からは、当時の石巻の港の繁栄ぶりや人家がひしめいている様、その人家から食事の準備の時間帯なのか竈の煙が立ち上がっている様子が目に浮かぶ。入江に集った廻船は、当時の絵図を見ると現在の中瀬周辺と考えられる。その後も東日本大震災の津波によって甚大な被害を受けるまでは、中瀬は石巻の産業、文化の中心として造船業、劇場、商店が置かれ、遣欧使節船サン・ファン・パウティスタ号復元船の進水も中瀬で行われている。石巻での宿に関しても、曾良の日記では刀さしたる同行者による四兵衛宅への口利きがあったとあるが、『奥の細道』では、「思ひかけずる所にも来れる哉と、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。漸(ようよう)まどしき小家に一夜をあかして、明れば又しらぬ道まよひ行」と、宿探しが大変でようやく貧しげな小家に泊まることができたと描かれている。いかにも当初予定になかった町に迷い込んでしまい、大変な目があったと言いたげで、翌朝もよくわからない道を迷いながら進んだと、迷子感満載の叙述である。

和歌にも歌われた石巻の上記名所についても、芭蕉は「袖のわたり・尾ぶちの牧・まのゝ萱はらなどよそめにみて、遥なる堤を行」とそっけない。曾良には奥州への旅に先立って訪れる予定の地の歌枕をまとめた「歌枕覚書」(名勝備忘録)があり、芭蕉も、本当は歌枕としてはより知られた姉齒の松や緒絶の橋を訪れたかったと思われ、道に迷ったためにそれがかなわず残念な気持ちを持ったまま石巻にたどり着いたとも考えられる。ただ、道に迷ったとは言え、松島から海岸線を東進していることを見ると、途中鳴瀬川を渡る頃には気づいて北に進路を変え、緒絶の橋や姉齒の松を訪れて一関から平泉を目指すこともできたはずである。しかも、平泉から岩出山を経由して目的地の尾花沢に行く途中、行こうと思えば奥道中(奥州街道)を南に下ってこれら2つの歌枕の地に立ち寄ってから岩出山を目指すこともできたであろう。ところが芭蕉は、一関からは奥道中の裏街道とも言える栗駒、真坂を通る奥州上街道を通過して、政宗が仙台に本拠を移すまで住んでいた岩出山に到着している。しばしば虚構や記録の錯誤が指摘される芭蕉が「終に路ふみたがへて」と言ったところで、その時の気分的、情緒的表現を避けて事実を正確に伝えたと言われる曾良の旅日記では、石巻への立ち寄りが違和感なく受け止められている事実を見ると、石巻に対して芭蕉がここまで関心がなかったような態度を装った背景には何か秘めたものがあつたのかと疑ってしまう。旅人等の番所の出入りに着目した金森敦子氏は、仙台藩を縦断するのにおよそ6~7日しかかからないところを、芭蕉たちが尾花沢に行く途中で鳴子の尿前番所から出国するのに、その約2倍の時間を要したと指摘する。あまり長く藩内に留まると色々疑念が生じるなかで、道に迷ったために不本意にも俳人としてはあまり興味が沸かない石巻に迷い込んだことを強調したげの芭蕉に対しては、芭蕉隠密説が再度持ち上

がっつきそうな迂路紀行でもあった。

話を日和山に戻すと、震災直後の報道では、多くの住民がここから町が津波に飲み込まれる様子を目撃している状況が映像で紹介されていた。日和山の下にあった門脇小学校では震災時に在校していた生徒全員が無事避難し、避難が遅れ多くの犠牲者を出した大川小学校と対比されることもあったが、極めて不幸な比較である。震災 10 周年直前に放送された NHK スペシャルの「津波避難 何が生死を分けたのか」では、地震発生から津波の襲来までの避難活動の状況を検証する中で、門脇小学校校長に率いられて日和山に避難した児童を追って、父母や近隣住民も山に登って行った様子がシミュレーション CG で再現されている。校舎は被災を免れなかったが避難の成功例として注目された門脇小学校は、震災遺構として保存されることになる。

津波の被害はともかくも、宮城県に流れ込んだ北上川の下流域は、現在の穀倉地帯を想像することができないような大遊水地帯で、大雨になると大洪水によって流域の氾濫が繰り返されていた。当然流域に住む住民は甚大な被害に苦しみ続けていた。こうして北上川の改修が江戸時代初期の慶長、寛永年間に始まるのであるが、改修工事を指揮したのが、登米寺池館主の白石



日和山の川村孫兵衛立像

石（伊達）宗直と、後に「石巻の恩人」と呼ばれた仙台藩士の川村孫兵衛重吉である。川村孫兵衛の業績は、単に北上川の流路を変える治水工事によって洪水を防ぎ新田開発を推進したのみならず、それ以上にこの流域の舟運の発展に貢献したことである。即ち、河口港石巻の発展には、海運のみならず河川舟運の発展が不可欠であり、そのためには北上川の改修工事が必須とされた。南部藩は改修が完成した寛永末年頃から藩米等の物資を北上川舟運によって石巻に運び、そこから江戸に廻漕している¹³⁾。芭蕉が見た石巻港の繁盛ぶりは、孫兵衛の功績によるところが大きい。仙台市に本社を置き宮城県の地方紙ながら東北地方全体への広域的影響力があるブロック紙として評価

されるようになった河北新報社によって1983年に建立され、その後石巻市に寄贈された孫兵衛像を写真に収めて日和山を下山する。

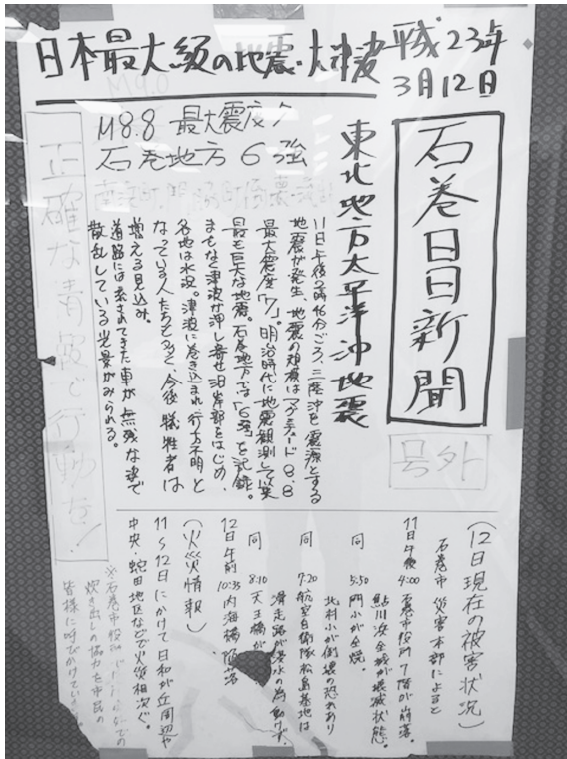
死者、行方不明者を合わせて500人を超える犠牲者を出した石巻南浜地区に、3月末に開園予定である石巻南浜津波復興祈念公園と門脇小学校の遺構を見ながら、次の訪問地である宮城県慶長使節船ミュージアム（サン・ファン館）に向かう。サン・ファン館では、展望棟で展示と映像を見た後、濱田直嗣館長（仙台市博物館前館長）と学術交流を行った。その後風雨の中ドック棟に移動し、「伊達の黒船」と称されたサン・ファン・パウティスタ号の復元船を見学。船の老朽化のため乗船はで



サン・ファン館のサン・ファン・パウティスタ号復元船

きなかったが、震災後10年の今年3月末に、船の老朽化や維持管理費の増大のため一般公開を終了し解体作業に入るとのことで、ギリギリ間に合っただけの見学となった。市民団体「サン・ファン・パウティスタ号を保存する会」による運動や、日墨交流史の重要な一部として復元船の保存を望むメキシコからの要望等はあるが、解体の方針に変化はないようである。今後は、以前人文研の総合研究調査で訪れた佐賀県の佐野常民記念館・世界遺産「三重津海軍所跡」で体験したような、VR技術を駆使したバーチャル体験の場を期待したいが、2021年4月8日付の『河北新報』によると、老朽化が著しいサン・ファン・パウティスタの解体は、今秋以降に着手し繊維強化プラスチック製で現在の復元船の4分の1の大きさの後継船を作るとのことである。

サン・ファン館の調査を終え、旧北上川の中瀬に建つ石ノ森萬画館を前にした石巻元気市場で昼食を済ませる。その後、近くの石巻市復興まちづくり情報交流館で同館スタッフから被災時の状況の説明を受ける。続いて隣の石巻ニューゼを見学。ニューゼはニュースとフランス語で博物館を意味するムゼを合わせたもので「ニュース博物館」の意。ここには、石巻日日新聞社（ひびしんぶんしゃ）が震災直後に手書きで発行した壁新聞が展示されている。実際に壁新聞発行に携わった女性記者から当時の状況を聞く。震災翌日平成23年3月12日に発行された



震災翌日の石巻日日新聞社の壁新聞第1号

壁新聞第1号を見ると、まだ被害状況の詳細も入っていない段階ながら「日本最大級の地震・大津波」と横大見出しが黒のマジックで書かれ、「M8.8, 最大震度7, 石巻地方6強」と青で、その下に赤で「南浜町、門脇町倒壊・流出」と石巻日日新聞社に近い両町の津波直後の状況が短くも鮮明に伝えられる。各号5部ほど作成され、当時の厳しい状況下で被災者の貴重な情報源となった。この壁新聞は、2015年3月に英国のウィリアム王子が石巻市を訪問した時にご覧になっており、同新聞社による非常事態時の壁新聞発行は国際的に注目を集めた事例であった。

石巻日日新聞社前を通過して次の調査地東松島市に向かう。ここからは、芭蕉と曾良が松島から石巻に至ったコース

のほぼ逆の行程である。同市にはアクロバット飛行チームのブルーインパルス（第11飛行隊）が所属する航空自衛隊松島基地がある。基地は津波に襲われ駐機中の多くの航空機が水没したが、ブルーインパルスは九州新幹線全線開通記念飛行のため福岡の芦屋基地に駐機しており難を免れた。松島基地正門前を通過して、仙石線東矢本駅北に位置するあおい地区の高台移転地区を訪れる。この地区の住民は津波で壊滅的被害を受けた同市の大曲漁港の住民であったが、住民主導で進められた街づくりに基づく集団移転の成功例としてマスコミでも取り上げられた。東松島市は2011年12月に国の環境未来都市構想の選定を受ける。防災集団移転と持続可能な復興まちづくりを進める上で同市が頼ったのが、この構想により確保の見通しが立った特定財源であった。構想には、再生可能エネルギーによる自立分散型の電源の構築と建造物の低炭素化等が含まれる。東松島市で大曲地区と同じく津波の被害が甚大であったのは野蒜地区である。被災した旧野蒜駅プラットホームに隣接して建つ東松島震災復興伝承館を訪れた。現在の仙石線野蒜駅は旧駅からも見える高台に建つが、伝承館では、この町に津波が押し寄せる様子が映像で流されていた。映像で映しだされる津波被害の現場に立っているが故に衝撃的である。

バスは仙台に向けて出発したが、道路（奥松島パークライン）の左に東名運河（とうなうんが、別称野蒜運河）が流れる。東名運河は野蒜の東を流れる鳴瀬川まで結び、鳴瀬川を渡った左岸（東側）からは北上運河が東へ通じて石巻市の石井閘門で旧北上川に繋がる。鳴瀬川河口には野蒜築港跡がある。ここでの築港計画は、嘗て北前船や九頭竜川の水運で栄えた三国港や熊本の三角港とともに明治の三大築港と称されたが、鳴瀬川の土砂の堆積等の問題もあり港湾としての機能を果たすことはなかった。鳴瀬川の河口に内港を作って小型船舶用の港とし、陸繋島である宮戸島と野蒜の間には外港を建設して大型船を停泊させる計画であった¹⁴⁾。オランダ人設計者ファン・ドールンの港湾設計の不備に加え、彼の後ろ盾であった大久保利通暗殺の影響もあったが、直接的には1884年9月の台風による突堤の流出により本計画は中止となった。2011年のような津波被害ではなかったが、太平洋の波浪を直接受け、台風、鳴瀬川の漂砂の他に、後述の仙台港と違って後背地に都市を持たない野蒜の選定自体にどう見ても問題があったとしか思えない。港湾開発が地域発展には重要であると考え、門司、若松、大船渡等の築港事業に関与した渋沢栄一は、野蒜築港の中止に際し「東北六県の現状は、日々進歩しているとはいえ、日本全体と比較すると残念ながら不振であるといわねばならない。野蒜築港の失敗は、地方商工業の発展を阻害した大きな原因の一つであるといえる」と述べ、築港計画の失敗が東北開発の足枷となったとの見解を示している¹⁵⁾。

一方、明治期の国際貿易港整備の一環として野蒜築港と共に東名、北上両運河が建設された。東名運河は西は京浜水門で松島湾に至り、松島湾及び塩竈湾を超えて、塩竈市の大代水門から阿武隈川河口の新浜水門までは貞山運河（貞山堀とも呼ばれる。貞山は伊達政宗のおくり名）が掘られている。こうして海岸線に並行して掘られた3つの運河が約50キロにわたって仙台湾沿岸を繋ぐことになる¹⁶⁾。これら3つの仙台湾岸運河は土木遺産であるが、かつては水運の役割を期待されていた。さらに、貞山運河が流れる荒浜地区などでは、運河は地域行事や漁業の面でも重要な役割を担っていた。運河での灯籠流しは夏の風物詩であり、漁業において堀は汽水域でもあることから、シジミやシャコ、カレイや鰻も多く獲れたとのことである。また沿岸部の交通アクセスとして貞山堀から船で松島まで遠足に行ったという嘗ての小学生の証言もある。明治期に貞山運河として今日の運河の形が出来上がった時には、塩竈と関上の間で航路が開かれ、定期船が就航するようになっていた¹⁷⁾。

貞山堀は、北から御舟入堀（塩竈湾～七北田川間、1597～1601）、新堀（七北田川～名取川間、1870～1872）、木曳堀（名取川関上～阿武隈川河口、1597～1601）と連なるが、荒浜地区を流れる新堀は、明治初期に開削された3つの中では最も新しい堀である。高度成長時代に入ると、仙台港を建設してその後背地に大工業地帯を作る計画が策定されるが、そのために貞山堀の一部が消滅することとなる。野蒜築港は東北開発の幕開けのはずが失敗し、東北地方の工業化を大

きく遅らせたこともあり、仙台港建設に対する地元の意気込みには並々ならぬものがあった¹⁸⁾。しかし、海岸線と並行して走るこれらの運河は津波の被害をまともに受け、被災後復興のシンボルとして、2013年に貞山運河再生復興ビジョンが策定された。また、被災後にこの地域では埋蔵文化財試掘・確認調査が行われている。嘗て御舟入堀の南部分で七北田川に合流する地点から北に数百メートル上った辺りに舟溜りがあり、その西側には蒲生御蔵が設けられて貞山堀の物流拠点として機能していた。震災後の2015年度には御舟入堀の南部分のこの蒲生地区で調査が行われ、舟溜り跡の南岸で護岸施設が確認され、御蔵跡からは100点以上の木簡が出土している¹⁹⁾。

帰京のために仙台駅に向かう途中、仙台市地下鉄東西線の東の終点荒井駅に隣接する「せんだい3.11メモリアル交流館」に立ち寄る。この施設は、津波被害の大きかった仙台市東部沿岸地域にあって、震災の記憶を語り継ぐ場所として設立された。1階にある立体地図では仙台市の標高差が確認できるが、津波被害は荒井駅のすぐ東まで迫っており、現在のところ東西線がここで止まっていることも理解できる。2階廊下の仙台沿岸イラストマップには、沿岸各地域の思い出が小さな紙に書かれて貼り付けられている。時間があれば訪問の可能性のあった貞山運河近くの震災遺構荒浜小学校、津波の映像が全国に放映された名取川河口の閑上地区に貼られたコメントに特に注目する。

3日間に及ぶ調査を終え仙台駅で解散。今回の調査に当たっては、計画段階から李東勲先生の他に2021年3月末まで名取市の尚絅学院大学に本学国内研究制度を使って滞在されていた人間科学部社会学科の大矢根淳先生の助言を得たことを、ここに記して感謝したい。

¹⁾ 山本安三郎編『曾良奥の細道随行日記 附元禄四年日記』小川書房、1943年、26頁。仙台藩領内での芭蕉と曾良の行程については、金森敦子『「曾良旅日記」を読む』法政大学出版局、2013年、26-41頁及び櫻井武次郎『奥の細道行脚』岩波書店、2006年、61-79頁を参照。

²⁾ 村上直次郎譯註『ドン・ロドリゴ日本見聞録 ビスカイノ金銀島探検報告』雄松堂書店、昭和45年改訂復刻版、102-103頁。

³⁾ 東日本大震災 石巻専修大学報告書第4号。

⁴⁾ 活動の詳細は、所澤新一郎、佐藤慶一、大矢根淳「調査報告 復興ステークホルダーの探索的再構築に関する研究実践-被災地・石巻での聞き取り調査から-」『専修大学社会科学研究所月報』no. 660 (2018年6月)を参照。

⁵⁾ 『日本経済新聞』2020年11月11日 (www.nikkei.com/article/DGXMZO66082720R11C20A1000000)

⁶⁾ 『河北新報』2021年5月29日 (<https://www.msn.com/ja-jp/news/national>)

⁷⁾ 津波対策や各種避難対策の効果もあり、また2011年の津波では分母にあたる浸水域人口が大きかったため、11.63%という値は、死者・行方不明者2万人以上を出した1896年の明治三陸地震に伴う大津波の時と比べるとかなり小さいが、犠牲者数の絶対値はかなり大きい。吉野正敏「地球環境問題としての津波被害について」『地球環境』、vol. 18, no. 1, p. 4を参照。

⁸⁾ 宮城県の城郭に関しては、平井聖『日本城郭体系3 山形・宮城・福島』新人物往来社、1987年、紫桃正隆『史料仙台領内古城・館』第3巻、宝文社、1973年を参照されたい。

⁹⁾ 山本安三郎編『曾良奥の細道随行日記』、27頁。

¹⁰⁾ 「又石ノ巻ニテ新田町四兵衛と尋宿可借之由云テ去ル」同書。

¹¹⁾ 櫻井武次郎『奥の細道行脚：曾良日記を読む』76-78頁；金森敦子『「曾良旅日記」を読む』40-41、付表1及び2。芭蕉が旅した元禄期の石巻の町は、幕府や藩の通達を告示する石巻札場があった本町（後述の石巻元気市場や復興まちづくり情報交流館周辺）を中心として、中町、横町、裏町があり、更に新田町が加わった。『石巻の歴史』、第2巻通史編（下の1）、石巻市史編さん委員会、88-109頁。なお、グランドホテルの近くには嘗ての鑄銭場跡がある。江戸時代、幕府は仙台藩に貨幣（寛永通宝）の鑄造を認めたが、藩は鑄銭場として石巻を選び1728年頃から鑄造が開始されている。東北大学図書館所蔵の石巻絵図を見ると、鑄銭場は田んぼに囲まれ、川沿いの本町や中町に比べると人家が殆どないことが分かる。石巻鑄銭場の詳細は、岡田広吉、加藤清一「仙台藩石巻鑄銭場絵巻について」『日本鉱業会誌』no. 93 (1067)、39-41頁を参照。石巻絵図では、日和山の東と南に位置する門脇村に家屋が立ち並び、北上川で船舶が多く係留されている様子が描写されていたことから、廻漕や漁業で村が栄えていたことが分かる。門脇からは北上川の対岸の湊町に向かって渡船が行き来していた。もちろん造船施設があった中瀬が石巻の港の中心であったことは言うまでもない。

¹²⁾ 姉齒の松は、美男で恋多き在原業平が詠んだ歌「栗原や姉齒の松の人ならば都のつとにいさといわましを」（『伊勢物語』第14段）で知られる。みちのくの野卑な女の悲恋が描写されている段であるが、女を愚弄するこの歌の「姉齒の松の人ならば」の意味を理解せず、「喜ぼひて、思ひけらしとぞ言ひをりける」と反応した愚かだが純粋な女の哀れが印象に残る。貴女が姉齒の松にちなむような美人であったならばと、美しき存在を想起させる歌枕である。緒絶の橋（おだえのはし）は、陸奥国の歌枕且つ悲恋や叶わぬ恋を暗示する歌枕で、藤原通雅が密通の噂のあった伊勢の斎宮当子内親王におくった歌「みちのくのをだえの橋や是ならむふみみふまずみ心まどはす」（『後拾遺和歌集』）が有名である。大井田晴彦『伊勢物語 現代語訳・索引付』三弥井書店、2019年、36-38頁；久保田淳、平田喜信校注『後拾遺和歌集（新日本古典文学大系8）』岩波書店、2019年、243-245頁；日本伝承大鑑（<https://japanmystery.com/miyagi>）

¹³⁾ 『石巻の歴史』、第2巻通史編（下の1）、64-70、116-120頁。石巻港は北上川の河口港であるが、河川舟運は海運と密接に関連しており、特に仙台湾の内湾海運は、仙台藩主導で整備されていた。同書、60-64頁。

¹⁴⁾ 宮戸島は今回の調査で訪れたかった島であったが、時間の関係で断念せざるを得なかった。この島には、デザイン監修者故ザハ・ハテイドの設計に敗れたが（この設計は高額建築費のために後日白紙撤回）、新国立競技場の当初の設計で最終コンペに残り入選を果たした妹島和世と西沢立衛が、被災地のために設計した「宮戸島のみんなの家」や「宮戸島月浜のみんなの家」という小さな建造物がある。「みんなの家」は伊東豊雄が代表を務め妹島も加わる NPO 法人 HOME-FOR-ALL が被災各地に展開した建築プロジェクトである。

¹⁵⁾ 西脇千瀬『幻の野蒜築港 明治初頭、東北開発の夢』藤原書店、2012年、16-31、205-206頁；浅野源吾『東北振興史』上巻、東北振興会。

¹⁶⁾ 遠藤剛人『貞山・北上運河沿革考』仙台月急山叢舎、1989年。

¹⁷⁾ 『仙台市史』特別編9（地域誌）、仙台市史編さん委員会編、186頁。

¹⁸⁾ 大和田雅人『貞山堀に風そよぐ』河北新報出版センター、2019年、35-42、88-91頁；『仙台市史』特別編9、185-186頁。

¹⁹⁾ 『宮城県仙台市 貞山堀・蒲生御蔵跡ほか』仙台市文化財調査報告書第464集、仙台市教育委員会、2018年3月。